

Interview

ナンディータ・ダース監督

表現の自由求めあらがう ウルドゥー語作家描く映画「マントー」

現代インド・パキスタン 文学を代表するウルドゥー語作家、マントー(1912~55年)の生涯を描いた映画「マントー」(2018年、日本未公開)の上映会が、東京と大阪で開かれた。監督のナンディータ・ダースさん(51)が来日し、上映に合わせたトークイベントなどに参加した。

作家マントーは社会の底辺に暮らす人々を描き、宗教や表現の自由の問題に挑んだ。ナンディータさんは「今、インドは自由にモノを言える環境にはないと感じています。マントーの映画を通じて、人々にこのことを問いかけたいと思います」と述べた。そして「彼はいろいろなことに抵抗してきた作家。今の私の考えや人生に合っているように思

っています」と自分の活動をダブらせた。映画製作にあたっては、間接的ではあったものの、さまざまな圧力を、さまざまな場所から受けたという。だが、「表現の自由を問題にしようとした映画です。そんなことでやるのはおかしいので続けました」。



物語は印パ分離独立前後の動乱期。人気作家マントーは、ボンベイを拠点に創作活動を続けていた。性を扱った作品は検閲の対象にもなり、長期の裁判に悩まされることになる。「ありのままを書いて何が悪いのか」と語るマントーは信念を貫くが、やがて酒におぼれ、生活はますますひどく

映画の物語には、マントーの作品を劇中劇のようにちりばめた。ナンディータさんは「作家を理解するには、作品を理解することが大切です。だから作品を映画に入れていくことが必要だと思いました」と話した。



ナンディータさんは監督に加え、俳優、演出家としても幅広く活躍している。また映画界に入る前は、大学でソーシャルワーク(社会福祉)を学び、現在も子どもや女性などの社会問題に取り組み。監督作は「マントー」が2本目。08年の第1作「フィラーク」では、

【棚部秀行



自作について語るナンディータ・ダース監督—棚部秀行撮影



映画「マントー」の一場面 © Aditya Varma.

02年のグジャラート州での宗教暴動を描いた。

「表現の手法として、映画を通じて何かを伝えていくのが、一番いいと考えています。でも、自分から俳優や監督になろうと思ったことはありません。ソーシャルワークに関心があったて、それが発展して今の仕事になっています」。さらに「自分が役立てるものに、広く関わっていききたい」と強調した。

上映会は「東京外国語大

学「UFS Cinema」が主催。東京外大(東京都府中市)の文化事業として、15年から計50回以上開催している。上映会には専門家らによる解説が付き入場無料。映画を通じ、世界諸地域の社会や歴史、文化の理解を深めることを目的としている。